



# 漢詩を作ろう

全国漢文教育学会会長 石川 忠久

## 巻頭言

漢詩は、江戸から明治の頃には、いわゆる専門詩人が雲の如くあらわれ、一般の市民までもごく日常的に作ったり味わったりしたものだ。

考えてみれば、外国の、しかも完成するまでに二千年もかけて作られた高級な古典詩歌を、自由自在に作って楽しむ、ということはたいへんな事である。世界に、他に例がないだろう。世界で唯一、象形文字から発達した表意文字を用い、また世界で唯一、音楽性を持つ言葉を操るがゆえに、中国では、すぐれた詩が生まれたのであるが、日本人は「訓読法」を発明することによって、これを自由に味わい、また作ることに習熟した。「世界の七不思議」の一つ、と言ってもよいだろう。

明治以後、基礎教育に漢文の比重が減り、戦後は「漢字制限」や「漢文軽視」によって、漢詩の素養も衰えたが、埋み火のようなものが残っていたようだ。今から十三年前の平成十五年、「全日本漢詩連盟」を旗上げし、全国の目ぼしい詩社、吟社に呼びかけてみたところ、たちまち千五百人を越える同志がこれに応じ、さらに三十五都府県の連盟が誕生した。この勢いは、さらに拡がってゆくことが期待される。

ある県連では、地元の新聞に「漢詩を作りませんか」という呼びかけを載せ、集って来た三十人ぐらゐをクラスにまとめ、そこへ先輩が指導に行く、というシステムを作り、会員がどんどん増えているということだ。団塊の世代（この世代は漢文を少しやっている）がリタイアし始めたのも一因らしい。

漢詩は、長い年月をかけて磨きをかけて出来上ったものであるから、簡単に作れるものではない。韻を踏み、平仄を合わせ、和語（日本語）を避けるなど、いろいろ規則がある。面倒なようだが、いろいろのきまりがあるからこそ、達成感も生まれ、上手になったのがわかって、やり甲斐も出てくる。

学校教育から、「漢文」が疎外される今日、まずパズル感覚で漢詩に取り組むことにより、作る過程での必要性から、次第に漢文に親しむ、という道筋も出来てゆくであろう。